

非母語としての日本語の読解上の難所

—中上級を中心に、「ている」・「は」・連体修飾・文構造について—⁽¹⁾

菊 地 康 人

— 論 文 要 旨 —

母語でない日本語を読む場合、語句も文法も既習項目のはずなのに、他の要因で文意を取り違えてしまう場合がある。そのような読解の失敗を生じる場合の具体例を多くあげて、日本語教育において留意すべき指導事項として指摘する。中上級の読解を主とするが、一部、初級にも触れる。

主な4つの場合として、「動詞+ている」、助詞「は」、連体修飾、文構造・スコープを取りあげる。

第1節では「ている」について、その中核的な意味を〈いま〉を述べる〉ことと捉え、あわせて〈過去のことを〈いま〉につながっていると意識して述べる〉用法もあることをおさえることの重要性を見る。

第2節では「は」について、格の復元や「が」とのスコープの違いが解釈上のポイントとなることを見る。

第3節では連体修飾について、非制限的な用法についての知識・習熟の重要性などを述べる。

第4節では、文構造を捉えることの重要性と、そのためにはどのような語句に留意すべきかを見、特に否定や仮定のスコープがどこから始まるかを見きわめることの重要性を具体例で示す。

キーワード：「ている」、「は」、連体修飾、文構造、スコープ

0. はじめに

上級学習者でも、日本語の文意を取り違えることはある。原因は、語句の意味がわからなかったとか、語法・文法が難しい未習のものだったという場合が多かろうが、実は、語句も文法も既習の項目のはずなのに、ほかの要因で一ある種のもう少し深い知識が欠けていたために一取り違えてしまう場合がある。そのような読解の失敗を生じる具体例を多く

(2)

あげ、日本語教育において留意すべき指導事項として指摘する。中上級を主とするが、一部、初級にも触れる。タイトルは「難所」としたが、学習者は「難所」と自覚しているわけではなく、気づいていないことである。それだけに、指導さえすれば、それほど困難なく習得でき、読解だけでなくライティングにも活用できる一特に、学術的な読み書きを習得する場合には、確かな精読や的確な書き方をたすける重要な知識・スキルとなる一点なので、ぜひとも指導事項に加えたいことである。

主な4つの場合として、「動詞＋ている」、助詞「は」、連体修飾、文構造・スコープを、この順にとりあげる。

以下各所で、学習者に課す問を示し（一部、日本語教授者への問も含む）、それについての解説を述べる形で進める。[1][2]……は問の通し番号、(1)(2)……は例文番号である（問の中の例文、本稿の本文中の例文を問わず、通して番号を振る）。

1. 「動詞＋ている」

1.1 いわゆる〈パーフェクト（経験・記録）〉の「ている」

1.1.1 「ている」は〈いま〉のことか

「ている」には何通りかの用法があるが、中上級学習者にとっては、もうどれもすっかり身につけていて、何ら問題のない項目だという意識かと思われる。だが、意外な盲点がある。

[1] 次の文は、〈いま〉のことか。

(1) a. A氏は、X語の文法を記述する約4000の規則を立てている。

こう尋ねると、中上級学習者でもほとんどが「いまのことでしょう。」と答え、理由を問うと「ている」が使われているからと答える。実は、「ている」には、例えば

(2) モーツァルトは35歳で亡くなるまでに600以上の曲を作っている。（『みんなの日本語 中級Ⅰ』スリーエーネットワーク、11課 p.146）

のように過去のことを述べる用法もある。この用法には、〈経験〉（藤井1966：66，1976：106）、〈経験・記録〉（教科研1963：152）、〈回顧的な～テイル〉（寺村1984：133-135）、〈パーフェクト〉（工藤1989：57-58，1995：98-99）、〈効力持続・記録・完了〉（庵2001）⁽²⁾などさまざまな名づけが行われているが、名づけ方はともかく、このような用法の存在については、中上級者の多くは学習しているのではないかと思われる⁽³⁾。だが、(1) aに出会った

学習者は、(2)のような文で習ったその知識がなかなか活性化されないようで、(1) a は〈いま〉のA氏のこととして読むわけである。A氏の正体がわからない場合、これは自然な読み方ではあろう。母語話者でも、同じクイズを行ったら、〈いま〉のことという答がかなりの割合にのぼるかもしれない。

だが、A氏とX語のところを次のように埋めたら、どうであろうか。

(1) b. パーニニは、サンスクリット語の文法を記述する約4000の規則を立てている。
 パーニニ (Pānini) は、一般的な知名度はそれほど高くないかもしれないが、言語学史には必ず登場する実在の人物で、紀元前5～4世紀頃、この文の通りの業績を残している。つまり、この文は(2)と同じ用法で、〈いま〉のことではない。ということは、(1) a も〈いま〉のことと決めてはいけないわけである。筆者は、「ている」のこの用法の指導にあたっては、このようなクイズを通して、「ている」が〈いま〉のこととは限らないことを学習者に注意喚起してきた。

1.1.2 「ている」vs. タ形——過去のことを「ている」で表す心理は？

[2-1] (1) a, b や (2) では、「ている」も使えるが、普通にタ形「……た」も使える。

タ形を使うのと「ている」を使うのとでは、(もちろん述べる事実が変わりはないが) どのような点が違うと見られるか。

[2-2] 過去にしたことを、タ形でなく「ている」で述べるのは、どのような場合か。

これらの問は、学習者に向けて問うには難しすぎよう。むしろ、「ている」が過去のことに使われる場合があることを学習した学習者から、教授者に対し発せられる質問である。

なかなか答えにくい問であるが、概略、タ形は、単に、過去にそのようなことが生じたことを肅々と述べるだけなのに対し、「ている」を使う場合は、それ(=過去にそれが生じたこと)が〈現在につながっている〉という把握が話し手にある場合である、といえるかと思われる。

先行研究の中にも、この用法の「ている」について、「発言している「今」とのつながりが、心理的にはタ形の文以上に深い」(渡辺1969: 58)、「現在に意義をもつ過去の事象」(寺村1984: 131)、「[効力・記録]の「ている」は過去の出来事を現在に関係させて述べる用法である」(江田2009: 43)といった記述が見える。また、工藤(1989: 67, 1995: 99)は、〈ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力をもっていること〉を〈パーフェクト〉と呼ぶとしているが、これは工藤のいう〈未

(4)

来パーフェクト〉〈現在パーフェクト〉〈過去パーフェクト〉全体をカバーする定義であり、ここでの本稿の関心からは〈現在パーフェクト〉だけを問題にして、〈ある設定された時点〉を〈現在〉と読み替えてよいと考える。したがって、これも同趣旨のものである。

〈現在につながる〉の具体的なあり方としては、工藤（1989：96，1995：142-145）は、

- a. 話し手の現在の判断を根拠づける（話し手の判断の理由＝推論の根拠となる）過去の出来事をさしだす場合
- b. 「なぜか」「真実かどうか」など、話し手が現在問題とし、聞き手に説明、解答を求めている過去の出来事である場合

の2つをあげ、aの例として下記（3）など、bの例として（4）（5）などをあげている。

（3） 検察官の質問は（略）不適當であります。証人はすでに聞いたことはないと答えています。（大岡昇平『事件』『新生活』新潮文庫 p.400、工藤1989：96，1995：143）

（4） ところがあなたは今年の四月には、長後町に移転している。なぜですか。（大岡昇平『事件』『午後の法廷』新潮文庫 p.269、工藤1989：96，1995：144に類例）

（5） 前回の公判でのヨシ子の証言によると、あなたはヨシ子に向って、宏がハツ子に惚れてると言ってる。どっちがほんとうなんですか。（大岡昇平『事件』『新事実』新潮文庫 p.423、工藤1989：96，1995：144）

他の研究者があげている例としては、「推理小説で、過去の事実を前にして推理を働かせる場面」「文学史、作家研究などや、スポーツ、囲碁将棋の記録、解説記事などで、過去の事件を改めて吟味し、その意義づけを行おうとする場面」を寺村（1984：135）があげている。ほかにも、例えば

（6） この点について林（19・・）は、次のように述べている。（谷口1998 例12a）
のように論文などで先行研究を「ている」で紹介する場合も指摘され、「そのこと自体はすでに過去に述べられたことであっても、それが現在でも有効であるかのように相手（読み手）に感じさせる一種の表現効果」（谷口1998：44）との見方が示されている。また、

（7） 太郎は、二十歳になる前に、お酒を飲んでいる。（鈴木2019 例6）
という例について、「二十歳になる前」という過去の時点で起きた「お酒を飲む」という事態が、現在にいたるまで何らかの影響を及ぼしている／何らかの効力を持っていること（例えば、その事実をもって太郎が社会的ルールを守らない人間であると現在判断できる、といったことなど）を表す」（鈴木2019：69）という説明も見られる。

（3）－（7）（また、具体例は省くが寺村のあげているケース）ではいずれも、「ている」は、過去のことを現在とつながりのあることとして捉えていると見ることができる。

もっとも、私見では、（6）では、その研究が「現在でも有効」とは限らないように思

うし、(7) も(説明の一例としてあがっているだけとはいえ)「太郎が社会的ルールを守らない人間である」ことまで表すという場合はそう多くはないのではと思われる。この種の「ている」を述べるのに〈効力〉はしばしばキーワードのように使われるが、庵(2001: 77-78)の指摘のように〈効力〉までは持たない場合もあり⁽⁴⁾、〈効力〉〈影響〉等の規定は避けて、〈現在とつながることとして捉えて述べる〉という程度の述べ方におさえておくのがよいと本稿では考える。(6)は、「その先行研究が今なお有効」かどうかはともかくとして、「その先行研究を受けて(あるいは、それに触発されて)、私はそれに続くことに取り組みます」というような気持ちとでも見ればよいのではないか。(1)bも同様で、この文の話し手(書き手)は、このパーニニについての内容を、その場(例えば、いま、言語学史を講じているその場)に結びつけるとか、このあと、その先の話につなげていくとかいう気持ちがあつての「ている」なのだと思われよう。(7)も同様で、「太郎が以前、未成年でお酒を飲んだ」ということが、いまこの文が発せられている場と何らかの点でつながっている、という点をおさえればよいのだと思われる。

要約すると、過去のことを述べる「ている」は、そのことを何らかの点で現在とつながることと捉えて述べていると見られる、ということである。先に(1)aなどを提示して、これは〈いま〉のことではないと学習者に指導することを述べたが、事実自体は〈いま〉のことではないにせよ、実は〈いま〉につながることを述べているのである。

この主張をしっかりと論証せよと求められると難しいものがあるが、以下の例を考えてみた。

- (8) 彼は先週会社を休んだ。お父さんが急に倒れて、大変だったようだ。
- (9) 彼は先週会社を休んでいる。今週もとなると、ちょっと具合が悪いだろう。
- (10) 彼は先週会社を休んでいる。例の事件が起こったちょうどその日だ。容疑者の可能性ありと見て、マークが必要だ。(刑事のことは)
- (11) 彼は今年に入ってから、1月に2回、3月に3回、4月と6月に2回ずつ、会社を休んでいる。つまり、今年に入ってからここまで9回も休んでいる。

以上各例で、それぞれの第一文の文末として、「休んだ」「休んでいる」のどちらがよい(他方が悪いとまではいえないにせよ)を考えてみよう。筆者の判断で、よいと思うほうの文を掲げてある。まず、(8)では「休んだ」のほうがよい。過去の事実をいわば粛々と述べているだけで、現在とのつながりを持つ面がほぼ見えないからである。(8)では第二文も第一文と同じ過去のことを述べている。(9)は「休んでいる」がよい。第二文から、いま「今週また彼が休む(休んでもよい)かどうか」が関心の対象になっていることが見てとれるので、その現在につながることを第一文で「先週の欠勤」を述べていることが見え、「ている」がふさわしい。(10)は、第二文・第三文から、いま「彼」が「例

(6)

の事件の容疑者」として浮上していることがわかる。それと「先週の（例の事件と同じ日の）欠勤」を結びつけようとしている文脈なので、「休んでいる」がふさわしい。(11)は、過去の欠勤を、現在までにわたって、いわば歴史的に記述しようとしている文であり、歴史的記述の総括時点としての現在と結びつけている「ている」である。

これらの具体例の追加により、先に述べたことの説得力が高まっていれば幸いである。

1.2 「ている」全体を貫くもの（コア）

「ている」にはいくつかの用法があり、1.1で見た〈パーフェクト〉あるいは〈経験・記録〉の「ている」はその1つ（派生的な用法）にすぎない。「ている」全体の用法の分類は、日本語学でも日本語教育の学習書・指導書等でも諸家によって行われ、分類の細部や名づけは完全に一致してはいないが、大筋は諸家それほど変わらない。

そうした「ている」全体を通しての、その中核的な意味（コア）を捉えることはできないか。それを見出せて、それを踏まえた指導ができれば、学習者を益することにもなる。これまであまり論じられてはいないが、ここに踏み込んでみたい。

まず、「ている」の諸用法を簡単に整理しておく。諸家それほどの違いはないので、一例として、グループ・ジャマシイ（1998）に拠る。ここでは「ている」が6つに分類されている。分け方と、各類の名づけ、代表的な例文を示す（例文は、同辞典と、代表的な日本語教科書『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）から適宜引く。ここでは例文番号は振らない）。各類の名づけの後の（ ）内は、本稿による補足である。

1 〈継続〉（〈進行〉とも、progressive）

子どもたちが走っている。／ミラーさんは電話をかけています。

2 〈結果〉（〈結果存続〉〈状態〉とも、stative）

窓が閉まっています。／着物を着ている人は誰ですか。／

ワンさんは独身ですか。いいえ、結婚しています。

3 〈繰り返し〉（〈反復〉と〈習慣〉に分ける場合も）

この病院では毎日20人の赤ちゃんが生まれている。／毎朝ジョギングをしています。／IMCで働いています。

4 〈経験〉（〈経験・記録〉〈パーフェクト〉などとも）

北海道にはもう3度行っている。／モーツァルトは600以上の曲を作っている。

5 〈完了〉

子どもが大学に入るところには、父親はもう定年退職しているだろう。

6 〈状態〉(〈単なる状態〉とも)

ここから道はくねくね曲がっている。/ 母と娘はよく似ている。

先の1.1では、〈パーフェクト〉あるいは〈経験・記録〉の「ている」が、〈過去のこととを、現在につながるものとして述べる〉ものだと見たが、すぐ上で見た1～6のように「ている」各用法の全体を改めて見ると、「ている」全体を貫く中核的なもの(コア)として、次のように見られるのではないと思われる。

「ている」のコアは〈いま〉を述べる〉ことである(〈過去のことを〈いま〉につながっていると意識して述べる〉場合を含む)。

「ている」のすべての用法は〈いま〉にかかわるとして括れるのではないかと見るわけである⁽⁵⁾。同様の趣旨の見方と見られるものに、大場(2010)と三原(2021)がある。大場(2010:96)は「ている」を「動きを積極的に参照時に位置づける形式」と見る(大場は「ていた」も一緒に扱いたいため「参照時」とするが、「ている」だけなら「現在」としてしまってもよからう)。また、三原(2021:68)は、「「ている」の構文群」について「〈いま・ここ〉を中核として拡張したものである」とする⁽⁶⁾。両氏の議論の進め方は本稿と同じではないが、結論は、「ている」と〈いま〉との関係を捉えようとする点で、基本的には同様のものとなっている⁽⁷⁾。

ちなみに、日本語教育では、多くの初級教科書が、少しずつ用法の違う「ている」を(場合によっては、上に示した以上に)細かく分けて提示することがよく行われているが、これは学習者には不必要な〈厄介な感じ〉を与えるように思われる。上記の1と2の区別を教えることや3が過去のことを述べていることへの注意喚起は欠かせないが、あとは、「ている」の基本は〈いま〉にかかわる言い方なのだという点をおさえれば、そのほうが unnecessary 細分よりも、学習者は学びやすいと思われる。

1.3 「ている」 vs. ル形 (の一面)

「ている」の性質をこのように捉えたところで、次を考えてみよう。

[3-1] 次の2文には、微妙な差異があるか。

- (12) a. X とは、……………と定義される。
- b. X とは、……………と定義されている。

いわゆるアカデミックジャパニーズでは、このように「定義され(てい)る」「分類さ

れ（てい）る」「推測され（てい）る」「解釈され（てい）る」「分析され（てい）る」「区別され（てい）る」「捉えられ（てい）る」「見られ（てい）る」「みなされ（てい）る」「位置づけられ（てい）る」「……とされ（てい）る」といった言い方がよく用いられ、学術論文等を書くとする学習者への指導事項となっている。ここで、「ている」が使われる場合（「定義されている」）と、使われずにただ現在形（いわゆるル形）が使われる場合（「定義される」）との差異についてまでは、学習者は意識せずに「どちらでもいい」という認識しか持っていないことが多い（教授者もそこにとどまっている場合が多いのかと思う）。実際、多くの場合は、どちらでもよく、大差ないのだが、時には、この文脈ではこちらのほうがよい、という差が出る場合もあるので、ここではこの点に触れておきたい。

それは、上に見てきた、「ている」は〈いま〉を問題にしている言い方であるということにかかわることである。「定義されている」なら、この分野の現状ではそのように定義されているという意味になる。一方の「定義される」はいわゆる現在形であるが、これは（現在形と言われることが多いが、実は）〈いま〉を問題にしているわけではなく、いわば時を超えた真理として述べる言い方だと見られる。次例では、この2つの言い方の差が出てくる（次例では動詞は「定義」でなく「分類」に変えてあるが、事情は同じである）。

[3-2] 次の文脈では、「される」「されている」どちらが適切か。その適否の差は、どこからくるかについても考えてみよ。

- (13) 敬語は、尊敬語・謙譲語・丁寧語に[分類される／分類されている]。だが、この分類は、簡便なものとしてはともかく、より正確に敬語を理解しようとする場合には、不十分である。本稿では、……

この文脈では「分類されている」のほうが適切である。(13)の書き手は、そのように分類されている現状には問題があるとして、代わりの提案をしようとしているので、「いま、こう分類されている」と現状を述べるだけの「ている」がふさわしい。もし「分類される」と述べれば、その分類を、〈いま〉だけのこととしてではなく、時を超えての真理のように述べることになる。そう述べてしまえば、これから自分が異議を唱えることとの整合性がとれないので、「分類されている」としなければならないわけである。

1.1ではタ形と、ここではル形と、それぞれ「ている」を比較し、微妙な差を捉えたが、どちらの場合も、「ている」は〈いま〉を問題にする—あるいは〈いま〉に関心をもって述べる—言い方である（タ形やル形にはその性質はない）ということがポイントである。日本語学習者に対して、このような指導を取り入れてもよいのではないか、という提案である。

2. 助詞「は」

「は」の絡む読解の主な問題としては、〈格の復元についての解釈〉〈「は」(vs.「が」)のスコープと、顕在化されていない主節の主語の解釈〉といった問題がある。どちらも読解上おさえるべき点であり、また、初級段階から習熟に努めるよう指導したいことである。どちらについても、別の稿で触れたことがあるが⁽⁸⁾、本稿の中にも組み入れておきたい。

2.1 格の復元についての解釈

[4] (初級の読解)

(14) 卵は朝食べて、魚は夜食べます。

「は」が主語に付くとは限らず、種々の格や「の」に代えて用いられることは、初級段階から指導が必要である。上例は、指導の過程で課すことがある読解であるが、この文に接した学習者は「魚は夜何を食べますか」と尋ねてくることがある。そうではなくて……と指導するわけである。

[5] 次の文はフィクションなので、動物の大きさなどを気にしないで読みなさい。

(15) ウサギはサルとイヌを飼っている。サルはキツネにもらって、イヌはネコにもらった。二匹は仲がいい。

問 「二匹」は何を指すか。

この問に接すると、中級でも「サルは」と「イヌは」の2つの「は」が理解できずに頭を抱える学習者がかなりいる。5つの動物の中に、擬人化されているものと、動物として飼われているものがあることが、パズルのような問題にしているが、「は」が「を」の意味で使われる場合があるという知識があれば解答できる。頭を抱えた学習者には「は」のこのような性質を頭に入れてもらうための設問である。

2.2 「は」(vs.「が」)のスコープと、顕在化されていない主節の主語の解釈

[6] 次の2文には、意味に違いがあるか。

- (16) a. 子どもは試合に負けるとがっかりする。
 b. 子どもが試合に負けるとがっかりする。

「がっかりする」のが、aでは「子ども」、bでは「親」である（「親」は、子どもを持つ話し手自身の場合も、文脈から了解される親子があつてその「親」である場合もある）⁽⁹⁾。これは、

- (16') a. 子どもは〔試合に負けるとがっかりする〕。
 b. 〔子どもが試合に負ける〕とがっかりする。

という構造の違い（「は」と「が」のスコープの広狭）から生じる違いである⁽¹⁰⁾。学習事項としては、「従属節中の主語は一般に「が」で示す」「主節・従属節共通の主語は「は」で示す」ということであり、その読解への応用篇である。「従属節中の主語は一般に「が」で示す」ということは、今日では、初級の段階で指導されることが多いようであるが、「主節・従属節共通の主語は「は」で示す」ことの指導は、初級から中上級まで、それほど行われていないようで、このため中上級者でも、aのタイプについて、読解やライティングで誤ることがある。（もっとも、初級教科書でもこの指導を行っているものもあり（*Situational Functional Japanese* 〈筑波ランゲージグループ〉12課、SD10）、見識というべきであろう）。bのタイプについては、顕在化されていない主節の主語の解釈が難しい場合がある。

なお、本小節のタイトルは「顕在化されていない主節の主語の解釈」としたが、顕在化されていても、「～は」（または「～では」「～においては」等）と「～が」の両方が示されている場合に、主節の主語の解釈を誤る場合がある。「は」と「が」のスコープの広狭の違いを理解していれば解釈を誤らないはずだが、その理解が不十分で、主節の述語に距離的に近い「～が」のほうを主語だと取り違えるというケースである。具体例は野田(2016: 312、例13)にあげられているので（長文でもあり）、ここでは省略する。

2.3 その他

「は」に関して指導したい点としては、もう1点、「～の」の主題化された「～は」への習熟を促したいという点がある。

「XはYがZ」文の中には「象は鼻が長い」のように「XのY」という関係が認められるものがある、という知識は多くの学習者が持っているが、「象は鼻が長い」と「象の鼻は長い」の違いとなると、「内容自体は大体同じ」という程度にしか捉えていない学習者が少なくない。だが、一方は「象」が〈主題〉、他方は「象の鼻」が〈主題〉という違いがあるので、文脈によっては、どちらかのほうが他方よりもふさわしい、ということがあ

る。しかし、多くの学習者の母語では、「～の」の～が〈主題〉になる文というのはあまりないようで、中上級になっても、「象は…」のほうがふさわしいところを一つ「象」が〈主題〉となっている（あるいは、なるべき）文脈で一、「象の…」のほうを産出してしまふ、といったことがしばしば見られる。

ただし、これは主としてライティングの問題であり、菊地（2021：8）で産出と修訂の具体例を示したので、ここではこれ以上踏み込まない。

3. 連体修飾

連体修飾の構文も、学習者にとっては、理解しているつもりのことではあるが、実は、今一步理解の不十分なところがあって正確な読解に達しきれない場合がある。

3.1 非制限的な連体修飾節の理解

[7]

(17) 先生は、熱心に勉強した学生たちに、プレゼントをあげた。

問 「熱心に勉強した学生」は「学生」のうち何%ぐらいだと思うか。

(17) は、「学生たち」の中から「熱心に勉強した学生たち」を選んでプレゼントをあげたというのが普通の解釈であろう。その上で、この問に対しては「何%かがわかるような情報はない」と感じつつも、それでも何%ぐらいと想像して一生懸命答えようとしたり、「0%でも100%でもないが、それ以上の情報はないから答えられない」という‘賢明’な解答をしたりする学習者がよく見られる。だが、(17) にはもう一つ、当該の学生全員が熱心に勉強したので、先生が全員にプレゼントをあげたという解釈も実は不可能ではない。「一部の学生」にあげた場合はいわゆる制限的 (restrictive) な [= 修飾される名詞に限定をつける] 用法、「学生全員」にあげた場合は非制限的 (non-restrictive) な用法である。

日本語の連体修飾は、制限的用法のほうが多いにしても、非制限的用法も少なくない。だが、言語によっては、名詞を修飾する節（英語なら関係節）の用法として、非制限的用法はあまり／ほとんど／全く使われないという言語もかなりあるようで、日本語学習者は、日本語の連体修飾を学習しても、母語の対応する構文に置き換えて理解しがちなため、日本語では実は非制限的用法もそれなりに用いられていることに目が向かない傾向がある。(17) でも、「全員」の解釈もありうると教授者が伝えたと、学習者は驚くことが多い。

[8] (本問は日本語教授者への問)

- (18) 時間に追われて生活している現代人にとって、時間は大切なものだ。だから、だれもが時間を有効に使いたいと思っている。

(『日本語中級 J 301』スリーエーネットワーク、p.78)

問 この文を読んだある学習者が「この文は矛盾 (contradiction) を含んでいて、おかしい」と主張した。彼は、どのような読み方をして、そう言ったのだろうか。

「暇な人もいるだろうに、「だれもが」はおかしいのではないか」というのが、その学習者の主張である。教授者としては、第一文に「時間に追われて生活している現代人」とあるではないか、君はこの文の筆者の主張に反対しているのか、と問いたくなるところだが、実は、そうではなく、この第一文が「現代人は (みんな) 時間に追われて生活している」という意味であること一つまり、第一文が非制限的な連体修飾節の構文であること一が読み取れていなかったのである。「現代人の中には、時間に追われて生活している人と、そうでない人がいる」という制限的な用法としての読み方をして、それなのに「だれもが」とはおかしいではないか、というのが、この学習者の主張であった。日本語の母語話者からすれば虚をつかれたような読み方であるが、非制限的な用法に習熟していなかったための読み誤りであり⁽¹¹⁾、考えてみればありうる読み誤りなのである。

[9]

- (19) 実際に首相公選制を実施してきたイスラエルの例を見てみよう。1992年の制度改革で、イスラエルはまさしく首相のリーダーシップの強化をねらって首相公選制を導入した。選挙で首相候補は、有権者に向かって直接、自分の実現しようとする政策を訴えかける。有権者の多数の支持を得た首相候補が首相になる。他方、首相候補を提示する任務から解放された政党は、もはや、社会全体の課題や要求を汲み取り、それを、国民全体にアピールするよう集約し、実行可能な政策として提示する必要はない。

(長谷部恭男『憲法とは何か』岩波新書、p.99-100、一部変更)

問 下線部の解釈として正しいものはどれか。

- a. 首相公選制をとる場合、政党の中には、首相候補を提示する任務から解放された政党と、そうでない政党が生じる。この任務から解放された政党は、首相のもとで実行可能な政策を提示する必要がなくなる。

- b. 首相公選制をとる場合、政党はすべて、首相候補を提示する任務から解放される。この任務から解放されるので、首相のもとで実行可能な政策を提示する必要がなくなる。
- c. 首相公選制をとる場合、政党はすべて、首相候補を提示する任務から解放される。この任務から解放されるが、首相のもとで実行可能な政策を提示する必要がなくなる。

下線部の初めの部分「首相候補を提示する任務から解放された政党」は、非制限的な連体修飾である。それが読み取れるかどうかが一つのポイントで、読み取れば、選択肢の a は排除される（読み取れずに a と答える学習者も結構いる）。残った b か c については、文意から「ので」の論理だと考えられ、b が正解となる。

非制限的な連体修飾は、以上各例のように理由節（例えば「……ので」）に言い換えられる場合が多い（(17) なら「学生たちが熱心に勉強したので」、(18) なら「現代人は時間に追われて生活しているので」、(19) なら「政党は首相候補を提示する任務から解放されるので」）。このことも、日本語では非制限的な連体修飾が時々使われるということとともに、指導したいことである⁽¹²⁾。

3.2 連体修飾節を含む（やや）複雑な文構造の文の理解 ― 初級レベルから ―

連体修飾節を含む文で（やや）複雑な構造のものには、いろいろなものがある。以下、とりあえず初級レベルを念頭に置いて、学習者にとって難しそうなものをリストしてみた。以下の例は、そもそもの趣旨は、初級段階からこうした文構造の理解を促す教育をしようという提案をする中で示されたものであるが⁽¹³⁾、この範囲のものでも、中上級者にとってもやや難しいものもあるかと思う。

- (20) Aさんが洗ってBさんがむいたりんごを食べました。
- (21) A先生が書いた本を読んだ学生は、みんなA先生の指導を直接受けたくなる。
- (22) 肉を食べるために使われる中国の箸は、魚を食べるために使われる日本の箸に比べ、先が太くなっている。
- (23) a. 電話するとすぐに来てくれる友だちがいて安心です。
b. 電話すると近くに住んでいる友だちがすぐに来てくれました。
- (24) a. お茶をいれてと言うとお茶をいれてくれるロボット
b. 人に気づくと笑うロボット
- (25) 紙を口に入れて頭を押すと、おなかの中にある針を口から出すものは何？

(20) は等位節を含むケース、(21) はいわゆる二重連体節を含むケース、(22) は非制限的な連体修飾節を含み、構造もやや複雑なケースである。

(23) は副詞節を含んでいて、連体修飾節の始まりを正しく把握する必要があるケースである。(23)の「電話すると」は、a では連体修飾節の中にあり、b では連体修飾節の始まる前にある。(24) (25) は文頭から連体修飾節が始まるが、連体修飾節中に副詞節を含んでいて、その副詞節の顕在しない主語を補って解する必要があるケースである。(24) aの「お茶をいれてと言う」の主語は人、bの「人に気づく」の主語はロボットであることを読み取る必要がある。

(25) は、〈なぞなぞ〉の形の文である。構造としては(24)と同様のさらに難しい例で、「紙を……出す」の部分が長い連体修飾節で副詞節を含んでいる。「紙を口に入れて頭を押す」の意味上の主語と、「おなかの中にある針を口から出す」の意味上の主語が異なり、前者は人、後者はロボット(=このなぞなぞの答。答が出ていない段階では主名詞の「もの」)であること、また「口」はその「もの」(=ロボット)の口であることを読み取る必要がある。なぞなぞは、この例に限らず、しばしば文構造が複雑であり、学習者の文構造の把握力を高めるのによい練習材料となる。

なお、連体修飾節が絡む 中上級者にとって読解の難しい文構造の例は、4.2.2 でいくつかを示す。

3.3 その他

連体修飾節の最も代表的なものは、主名詞が連体修飾節に対して格関係をもつ、いわゆる関係節と呼ばれるものである。例えば「Aさんが洗ったりんご」なら、「Aさんがりんご__洗った」という下線部に格助詞「を」を補って解釈できる(格助詞は「を」とは限らない)。だが、これ以外にも連体修飾節にはいくつかのタイプがあり、その一つとして、例えば「酔っぱらわないお酒」のように、主名詞と連体修飾節との間に明瞭な格関係ではなく緩い意味的なつながりがあるだけのものもあり(「(その) お酒__酔っぱらわない」の下線部に格助詞を想定しにくい)、この種のものは、日本語学ではしばしば、一種特殊な構文のように捉えられ、そのような取り上げ方をされてきた。

そのため、日本語教育でも学習者の理解が難しいかとも思われるところだが、この種の文に接した学習者は、筆者の経験では、ほぼ問題なく理解するようである。主名詞と連体修飾節の間の関係がどのようなものかという問題は、文法学者にとっては興味を惹かれる問題であっても、学習者は、主名詞と連体修飾節とに何らかの意味関係が見てとれば、問題なく受け入れるということのようである。ただし、こうしたタイプのものも、(特段

文法的な難しい解説を付け加える必要はないが) それなりに提示だけはしておくほうがよからう。下記は、筆者の以前の所属先で、初級学習者に提示していた読解文(教員が作成)の中で提示していたこの種の文である。

(26) [回転寿司についての説明の一部] 食べた皿の数で値段もわかります。

この「食べた」と「皿」の関係が「皿を食べる」という格関係ではなく、「食べた結果残る皿」というやや複雑な意味関係であるため、初めて提示したときには、文意がとれるかどうか気にながら提示したのだが、学習者は全く問題なく文意をとることができた。

4. 文構造、スコープ

4.1. ミクロなレベルでの文構造・スコープの把握

[10] (初級の読解)

(27) [リーさんの作文の一部] 研究がうまく行っているので、毎日とても楽しいです。学会で発表したり、論文を書いたりしてから、国に帰ろうと思っています。

問 次の文は、上の文の内容に合っているか。

リーさんは、国に帰るまえに論文を書こうと思っています。

これは、筆者が以前作成した初級の読解問題の一部である。出題の意図は、(27)の「てから」が時間的順序をあらわしていることが理解できているかどうかを見ようという単純なもので、ほぼ全員が正解する(=○×問題で、○と答える)であろうと見こんでいたのだが、正解率は意外に低く、×とする誤答が多く出た。「てから」を「たから」と誤読した場合には「学会で発表したり、論文を書いたり」は実現済みのことになり、上の問には×と誤答することになるが、「てから」は正しく理解できていても、「学会で発表したり、論文を書いたり」はもう実現済みのことで、「国に帰る」はこれからのことについての意向、という読み方をして、上の問に×と答えた学習者が多くいたのである。こういう読み方が、習熟の足りない学習者としてはありうるのだということに、筆者はここで初めて気づいたのだった。これはもちろん誤読で、「学会で発表したり、論文を書いたり」も「国に帰る」もこれからの意向を述べていると読むべきところである。

だが、その解釈をするには、

(27') [学会で発表したり、論文を書いたりしてから、国に帰ろ] うと思っています。という読み方、つまり、「帰ろ」の「う」(国文法でいう意志の助動詞)は、形の上では

「帰る」だけに付いているが、意味的・文構造的には、「帰る」の部分だけでなく、上の〔 〕全体をスコープとしている（〔 〕全体を受けている）という読み方ができていなければならないわけである。これは確かに、学習者にとっては（初級のみならず中上級の学習者にとっても）難しい読み方であろう。特に、意志の言い方の場合は、実質的には同じ働きを果たす「う／よう」が五段動詞には「う」、他の動詞には「よう」という違う形で付くため、「帰る」に付く「う」の働きが「……たり……たりしよう」という意味で前に及んでいることには気づきにくい。こうした点に学習者の目を向け、上文は

(27") [国に帰る前に、学会で発表したり、論文を書いたりし] ようと思っています。同じなのだという指導をする必要があるわけである⁽¹⁴⁾。

ちなみに、スコープの解釈に関係する指導としては、初級段階でも、テ形接続について、

(28) a. 6時に起きて、7時に出かける。

b. 6時に起きて、7時に出かけた。

の両文の「起きて」が、aでは「起きる」、bでは「起きた」の解釈となる一つまり、「る」「た」が、それぞれ、[6時に起きて、7時に出かけ]の全体をスコープとする—という指導は行っている教授者が多いと思われる。上記の「う／よう」の場合も、これに類することなのだが、こちらは、多くの場合、指導から抜け落ちてしまっている。

次も類例である。

[11]

(29) 私はこのような事件は社会の趨勢と無関係に起こっているのではないと思う。

(略) 大きな要因の一つは、マスコミュニケーションの機能不全にあると思う。

例えばテレビは、社会啓蒙的役割を本来持つはずの報道番組でさえ客観的でバランスの取れた情報を提供し、いろいろな角度から物事の是非を視聴者に判断してもらおうとする姿勢があまり感じられない。

(田中 均「時をよむ」、毎日新聞2008.12. 4. 夕刊6面)

問 最後の文にある「姿勢」とは、何をしようとする姿勢か、2点に分けて答えよ。

「客観的でバランスの取れた情報を提供しようとする姿勢」と「いろいろな角度から物事の是非を視聴者に判断してもらおうとする姿勢」が正解であるが、第1点を適切に指摘できない解答が見られる。理由は、(27)と同様、「もらおう」の「う」がここまでをスコープとすることに気づきにくいためである。「客観的でバランスの取れた情報を提供し、」が「……うとする姿勢」の中に埋め込まれた内容であることが読み取れないと、「客観的で

……提供し、」を主節の一部だと誤読し、「2点もあるのか?」ということになる。

4.2. マクロなレベルでの文構造・スコープの把握

4.1の「ミクロ」と、以下の「マクロ」とは程度の差でしかないが、便宜上、区別して節を分けておく。

4.2.1 「マクロな構造把握」のイントロダクション

[12]

- (30) たとえ小学生から英語の授業を始めたとしても、日本のような、日常的には英語を使う機会も必然性もほとんどない環境では、(略)1日1時間程度の授業では、ニューポート達の研究における手話の早期学習者のような、ネイティブとほとんど違いがないレベルの文法の習熟レベル、つまり知識が完全に手続き化され、意識的な注意なしに自動的に制御できるレベルに達するのは不可能である。(今井むつみ・野島久雄・岡田浩之『新 人が学ぶということー認知学習論からの視点』北樹出版、p.138、一部変更)

問1 この文の構造をマクロに把握せよ(細部に目を向けすぎずに、文の大きな「で き方」を捉える)。それを捉える上で目を向けるべき語句は、どれか。

問2 ほかに、この文の解釈にあたって目を向けるべきことは、どのような点か。

この設問は、文の構造・スコープをマクロなレベルで捉える重要性と、そのためにはどのようなことに目を向ければよいかということに注意喚起することが趣旨である。

問1のマクロな構造の把握とは、

たとえ……たとしても、……では、……不可能である。

という把握で、「(たとえ)……たとしても、」と2回出る「……では、」が、目を向けるべき語句である。どちらも、後件にしばしば否定的な内容を伴い、そうした予告機能を持つといってもよいほどである。こうした点を確認する、ウォーミングアップ的な問題である。

問2の「ほかに目を向けるべき点」は、「つまり」が何と何とをつないでいるかということと、「なしに」の前後の係り受け(「XなしにY」のXとYはそれぞれ何か)をおさえることである。

これらの点に留意して正確な読解を、というメッセージを送るための設問である。

(18)

[13]

- (31) 子どもの側での言語に対する感性や興味、英語を学習しようとする内的な意欲なしに週に1、2回授業をしてもいずれ子どもは飽きてしまい、ひとことふたこと決まり切った挨拶や応答ができるレベル以上にはならないだろう。

(今井むつみ他 上掲書〈例文(30)参照〉p.142)

問1 この文の構造をマクロに把握せよ。その際目を向けるべき語句は、どれか。

問2 「なしに」は、どの部分を否定しているか。

[12] と同様の趣旨の間である。

「……なしに……をし」でも……以上にはならないだろう

がマクロな構造の把握であり、目を向ける語句は「なしに」と「ても」である。ここでは、「なしに」は「……ても」の節の中の要素であることも、読み取る必要がある。

問2の「なしに」の否定する範囲は、冒頭から「なしに」の直前の「意欲」までで、かなり長い。読み取る力が求められる文章である。

4.2.2 具体例：否定の範囲はどこから？

[14-1]

- (32) 家畜行動学者は、これまで「つらさ」の指標となる行動と生理が発現しない状況を「幸せ」としてきた。そして、これまでの研究成果から、エアコンの効いた部屋で、働かずに食事がとれ、ベッドを整えずに好きなときに眠れ、子育ての苦労もなく、人工授精・人工哺乳で次世代へ続く生活ではなく、8～10時間も餌をとるために一生懸命に働き、暑いときは日陰に入ったり泥浴びをしたりしながら体調を整え、巣にできそうな場所を探しベッドを整えて眠り、子育てが終わるか終わらぬうちにまた妊娠し、ふたたび子育てをする苦労の多い生活にこそ、「幸せ」情動が生じる下地があると考えた。

(佐藤衆介「動物たちの「幸せ」とはなにか一家畜行動学者の視点」、『UP』34巻8号、p.49)

問 「ではなく」が否定する範囲はどの部分か。

「エアコンの効いた部屋で……生活」が否定の範囲である。上例は、

……V、……V、……V] N ではなく、

という形であるが、ここで、「ではなく」の前のN（「生活」）の直前のV（「続く」）だけではなく、その前のV（「とれ(る)」「眠れ(る)」）もNに係り、「ではなく」の否定のスコープに入っている。つまり、否定される範囲の始まりを示す「を」を付けるならば、

「……V、……V、……V」Nではなく、

という構造である（「の」の位置は「エアコンの」の前）。この点を読み取る必要がある。

ただ、このように複数のVが並び、最後に否定の語句が来る場合、いつも、否定の語句は、直前のVだけでなく、前方のVまでを否定するのだろうか。次例を見てみよう。

[14-2]

- (33) ジャーナリストにとって大事なことは、自らの足で取材し、自らの目で観察し、得た情報はそのまま信じるのではなく、疑うべき点は疑い、解釈し直すべき点は解釈し直し、最終的にはその報道が社会をよくすることに貢献するかどうかという見地から、自らの見識で内容と報道姿勢を選択して報道することである。

問 「のではなく」が否定する範囲はどの部分か。 (作例)

(33) も (32) と同じような

「……V、……V、……V」のではなく、

という形であるが、(33) のほうは、「のではなく」が否定する範囲は、直前のVが締めくくる句「得た情報は(を)そのまま信じる」の部分だけであり、「……取材し」「……観察し」は否定の対象に含まれない。否定される範囲の始まりを示す「を」を付けるなら、

「……V、……V、[……V]」ではなく、

ということになる。

同じ形でも、(32) のような場合も、(33) のような場合もあること—つまり、否定のスコープは広い場合も狭い場合もあること—に学習者の目を向ける必要がある。

4.2.3 具体例：仮定（条件）の範囲はどこから — 「と」の場合 —

[15-1]

- (34) スイッチを入れ、相手の番号を押し、「通話」ボタンを押すと、相手呼び出す音が鳴り、電話に出た相手と話すことができる。 (作例)

問 「……と」のスコープ（意味的にいえば、仮定／条件の範囲）はどの部分か。

「スイッチを入れ、相手の番号を押し、「通話」ボタンを押す」の全体を「と」が受けている。(34)は、

……V、……V、……Vと、……

という形であるが、「と」が直接付いているVだけでなく、その前の2つのVも「と」の範囲に入っていて、[] を付けるなら

[……V、……V、……V] と、……

という構造である。否定と「と」の違いはあるが、先程の(32)と似たケースである。

ただ、否定の場合と同様、同じ形でもスコープが異なる場合もある。次例を見てみよう。

[15-2]

(35) あの子は、よく勉強し、弟や妹の世話をし、知っている大人に会うと、きちんと挨拶し、家の仕事の手伝いもする。立派な中学生だ。 (作例)

問 「……と」のスコープはどの部分か。

(34)と同じ「……V、……V、……Vと、……」という形であるが、(35)では、「知っている大人に会う」の部分だけに「と」が付いている。「……勉強し」「……世話をし」は「と」のスコープには入っていない。すなわち、

……V、……V、[……V] と……、

という構造である。否定の例で言えば(33)のタイプである。

(34)(35)が示すように、同じ形をしていても、「と」のスコープは、広い場合も狭い場合もある。

4.2.4 具体例：仮定（条件）の範囲はどこから？ — 逆条件「たととしても」の場合 —

[16-1]

(36) 各政党は、当然のことながらそれぞれの議席の最大化を目指すであろうが、そのためには、各政党が代表するセクショナルな利益（たとえば労働団体、宗教結社、経営者団体など）の実現を目指すのが効果的である。労働団体の利益を主に代表する政党が、有権者全体へのアピールを考えて、他の利益団体の主張を取り入れ、労働団体の利益主張を抑制したとしても、他の利益団体の票を取り込むことは望み薄であるし、むしろ、労働団体の票が他の政党に流れてしまうおそれもある。 (長谷部恭男『憲法とは何か』岩波新書、p.100)

問 下線部の解釈として正しいものはどれか。

- a. 労働団体の利益を主に代表する政党は、有権者全体へのアピールを考えて、他の利益団体の主張を取り入れる。
- b. 労働団体の利益を主に代表する政党は、労働団体の利益を抑制するようになる。
- c. 労働団体の利益を主に代表する政党は、労働団体の利益しか考慮しなくなる。

……Vで、……V、……Vたとしても、……

という形であり、「たとしても」が直接付いているVだけでなく、その前の2つのVも「たとしても」のスコープに入っていること、すなわち、

[……Vで、……V、……V] たとしても、……

という構造であることを読み取る必要がある（先程の(32)(34)と似たケースである）。(34)のようにわかりやすい内容なら誤読の心配もないが、(36)のような難しい内容だと、このスコープを正しく捉えるのは結構難しく、初めの2つのVを、仮定の範囲に入っていることが読み取れずに、上記のaを正しいと思ってしまう学習者もかなり見られる。「……抑制する」は明らかに仮定のスコープに入っているので、bが誤りであることはわかりやすい。上記のように構造を捉えて、かつ、上の第一文（下線を引いていない文）の内容もあわせて考えると、正解のcに到達することができる、なかなかの難問である。

[16-2]

- (37) 彼は、広く情報収集に努め、これに彼独自の分析と優れた発想力を加えて企画を練り、それをタイミングよく実行に移して成果をあげ、時に期待通りに進展しなかったとしても、必ずそこから必ず何かをつかんで軌道修正し、長期的には必ず成功を収めてきた。

(作例)

問 「……たとしても」のスコープの始まりはどこか。

(36)と同様の「……V、……V、……V、……Vたとしても、……」という形であるが、この文は、

……V、……V、……V、[……V] たとしても……、

という構造、すなわち、「時に期待通りに進展しなかった」の部分だけに「たとしても」が付いていて、それより前の部分は「たとしても」のスコープには入っていない、という構造である（また、「……なかった」のスコープに入っているのも、「期待通りに進展し」だけである）。スコープの狭いケースで、前掲(35)（否定なら(33)）と同様のタイプで

ある。

以上、本節では、文構造・スコープの把握を誤る可能性のある諸例を見てきた。

以上、非母語として日本語を読む場合に、文意を取り違えたり、いま一步正確な理解に達しきれなかったりする可能性のある点を、「ている」、「は」、連体修飾、文構造・スコープの4系統に分けて指摘してきた。こうした点にも目を向けての精読の指導が必要である、というのが本稿の提案である。

注

- (1) 本稿は、イタリア日本語教育協会2014年研修会における筆者による基調講演（2014年3月21日、サビエンツァローマ大学）「中上級の日本語教育で目を向けたいこと—学術的な日本語まで読める／書ける学習者を育てるために—」をもとに、加除を行い、文章化したものである。

なお、本稿の関心に近い研究として、野田（2016）がある。ただし、取り上げている具体的な内容は、本稿と野田とでは一部が重なるだけである（それについては、2.2の末尾で触れる）。

- (2) 庵（2001）は〈効力持続〉と〈記録〉と〈完了〉を区別する立場である。
- (3) もっとも、高梨（2014：34）は、（同論文執筆時点で）中級教科書によってはこのような「ている」（高梨は〈経験・記録〉と呼ぶ）を取り上げていないものもあるとし、改善すべき点だとしている。
- (4) 庵は〈効力〉の残存と見られない例を、「ていた」の例であげているが、「ている」についても同様と見られる。庵のあげている例の1つを、その「ていた」を「ている」に変えてあげておく。

昨年、本因坊治勲と小林光一天元が相次いで1000勝を達成したが、大竹英雄九段も昨年5月に到達していることがわかった。（毎日新聞1999.2.7朝刊〈庵2001例9〉、その「ていた」を「ている」に変えて引用）

- (5) これは、筆者の元の所属先（東京大学日本語教育センター）では以前から採っていた見方である（論文での発表はしていない）。なお、上記のうち5〈完了〉とされる用法は、現在を未来にシフトしたもの（現在形は未来をも表すため）と見ればよからう。
- (6) 「ここ」まで含めるのがよいかは、本稿としてはもう少し考えたいが、例えば（1）bでいえば、このパーニニについての内容を、話し手（書き手）は〈いま、言語学史を講じているこの場〉に結びつける気持ちで、タ形でなく「ている」を使っていると見ることもできよう。
- (7) 英語の現在完了も、現在との関係で捉えられるものである。「現在完了は現在と何らかのかかわりを持つものとしての表現」であるとの記述が、例えば大塚・中島監修（1982）の perfect tense の項（p.853右）に見られる。日本語学の文献で英語の現在完了のこの点に触れたものは多くない模様だが、例えば鈴木（2019：69〈注3〉）が触れている。

- (8) 2.1 の内容については菊地・増田 (2009: 69-70) で、2.2 の内容については菊地 (2021: 6) で触れた。
- (9) これ以外の解釈も全く不可能ではないが、かなり特殊な場合なので、学習者に向けての説明では、それには触れない。
- (10) こうした事実は、三上 (1970: 11-13) の指摘がおそらく最初である (例文は異なる)。
- (11) この例は、筆者の以前の所属先で、実際に授業中に中級学習者から提起されたものとして、その授業を担当した教授者 (大関浩美氏) から教示を得たものである。
- (12) 非制限的な連体修飾節の中でも特に理由節に言い換えられるものについて、その談話的な機能 (本稿では紹介を省略するが) に目を向け、日本語教育での指導に取り入れていきたいとする論が増田 (2001) にある。なお、非制限的な連体修飾節が、いつも理由節への言い換えができるとは限らないことにも一応注意喚起しておきたい。
- 体調が悪いと言ってゼミを休んだ田中が、夜の飲み会には来て大酒を飲んでいた。
- の場合は、「体調が悪いと言ってゼミを休んだのに」と言い換えられるケースである。
- (13) 3.2 の諸例は、増田他 (2007) に多くを負う。
- (14) なお、(27'') では意志の助動詞が「よう」となっていて、「う」よりも 1 拍長いので意識されやすいと思われ、前半も意向の範囲に入るという意味は (27'') のほうが (27') よりも捉えやすいのではないと思われる。

文 献

- 庵 功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学 留学生センター紀要』4, pp.75-94.
- 大塚高信・中島文雄 監修 (1982) 『新英語学辞典』研究社.
- 大場美穂子 (2010) 「テンス・アスペクトの定義と「シテイル」形式の基本的意味」上野善道 監修『日本語研究の12章』明治書院, pp.84-97.
- 菊地康人 (2021) 「日本語教育における「は」と「が」」『國學院雑誌』122巻10号 (10月号), pp. 左 1-20.
- 菊地康人・増田真理子 (2009) 「初級文法教育の現状と課題—「です・ます完全文」をテンプレートとする教育からの転換を—」『日本語学』28巻11号 (9月号), pp.64-74.
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル (1963) 『文法教育 その内容と方法』麥書房.
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」言語学研究会 編『ことばの科学』3, むぎ書房, pp.53-118.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- グループ・ジャマシイ 編 (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版.

- 江田すみれ (2009) 「「効力・記録」の「ている」の「場の共有」という機能について—現在と関係させる過去の表現—」『日本語教育方法研究会誌』16巻2号, pp.42-43.
- 鈴木彩香 (2019) 「経験相を表すテイル文と属性叙述」竹沢幸一 他 編『日本語統語論研究の広がり—記述と理論の往還—』くろしお出版, pp.65-83.
- 高梨信乃 (2014) 「上級学習者のテイル形使用にみられる問題点—文法指導の隙間—」『日本語／日本語教育研究』5, pp.29-46.
- 谷口秀治 (1998) 「外国人に難しいスルとシテイルの使い分け」『広島大学 留学生センター紀要』8, pp.41-49.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 野田尚史 (2016) 「非母語話者の日本語理解のための文法」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版, pp.307-326.
- 藤井 正 (1966) 「「ている」の意味」『国語研究室』5, 東京大学文学部国語研究室, pp.55-79. [金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』麦書房, pp.97-116. に再録+追記]
- 増田真理子 (2001) 「〈談話展開型連体節〉—「怒った親は子どもをしかった」という言い方—」『日本語教育』109, pp.50-59.
- 増田真理子・大関浩美・前原かおる (2007) 「初級段階から始める「複雑な文構造」に対応する読解力の養成—連体修飾節を題材に—」『日本語教育学会春季大会予稿集』pp.279-280.
- 三上 章 (1970) 『文法小論集』くろしお出版.
- 三原健一 (2021) 「「ている」—いま・ここのカプセル化—」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』51, pp.67-78.
- 渡辺義夫 (1969) 「「～している」との関連における「～してある」」『福島大学教育学部論集 (人文科学)』21-2, pp.55-63.